

離任式と井伏鱒二

本日は、春季課外の最終日、50分授業の後、11:30分から退職異動される先生方との離任式となります。毎年のことではありますが、とてもさみしい気持ちになる一日です。出会いは突然だが、別れは周到に用意されていると大学時代に書いた小説の冒頭に書いた記憶があります。

中国の詩人に于武陵という人がいます。その人の作品に「勸酒」があります。

勸酒	書き下し文) 酒をすすむ
勸君金屈卮	君(きみ)に勸(すす)む 金屈卮(きんくつし)
滿酌不須辞	滿酌(まんしゃく) 辞(じ)するを須(もち)いず
花發多風雨	花(はな)發(ひら)けば 風雨(ふうう)多(おお)し
人生足別離	人生(じんせい) 別離(べつり)足たる

和訳(直訳)

君にこの金色の大きな杯を勧める
なみなみと注いだこの酒遠慮はしないでくれ
花が咲くと 雨が降ったり風が吹いたりするものだ
人生に 別離はつきものだよ

この最後の一文を「さよならだけが人生だ」と断じたのは、小説家の井伏鱒二(いぶせますじ)である。井伏鱒二は「山椒魚」を書いた人で、「走れメロス」の太宰治を色々世話をした人である。太宰の二人目の奥さんを紹介して媒酌人もした。それなのに、遺書に「井伏さんは悪人です」と書かれた人でもある。

(井伏鱒二の訳)

コノサカヅキヲ受ケテクレ
ドウゾナミナミツガシテオクレ
ハナニアラシノタトヘモアルゾ
「サヨナラ」ダケガ人生ダ

さよならをするとき、人は一番強く「人生」というものを感じる。嬉しいときよりも、悲しいときよりも、そして苦しいときよりも、であろう。人との別離は、いつも自分たちに大きな心のダメージを与える。

なぜなら、これが人生だからだ。居心地の良いところにずっと居られないことを人は本能的に知っているからだ。

別れの時に、「またどこかで」「またいつか」と言うことが多いが、本当はみんなわかっていると思う。「また」は心の重荷を取り除くことだけの言葉であることを。「どこか」も「いつか」もきつと決まっていはいないし、ないこともあり得るということを。さよならだけが人生なのだ。